授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 2120 号

Patterns of Relapse after Definitive Chemoradiotherapy in Stage II/III (Non-T4) Esophageal Squamous Cell Carcinoma

（ステージ II/III の食道扁平上皮癌に対する化学放射線療法後の再発形式に関する研究）

須藤　一起（すどう　かずき）

博士（医学）

論文審査結果の要旨
本論文は、根治的化学放射線療法を受けた 302 人の食道扁平上皮癌患者のうち、臨床的奏効を得た 204 人を後ろ向きに解析し、再発の形式やタイミング、検査診断感度、再発に対する局所治療の予後を明らかにすることで、根治的化学放射線療法後の適切なフォローアップ方法について検討したものである。 管腔内再発は治療後３年間に 90％以上が診断され、内視鏡で発見された新規がんは時間が経過しても頻度は減少せず年間 3～9％程度認めた。また、局所治療を受けた管腔内再発と内視鏡で診断された新規がんの患者の予後が良好であった。経過観察法が予後等のアウトカムに影響しているかは前向き比較試験により検証する必要があるが、内視鏡によるフォローアップで再発や新規がんを発見し、局所治療が行えた場合、患者の予後改善につながる可能性が本論文で示唆された。本論文は、食道扁平上皮癌に対して根治的化学放射線療法を受けて臨床的奏効を得た場合は、管腔内再発を診断するため治療後３年間は内視鏡のフォローが必要と考えられ、さらにその後も新規がんを発見するために内視鏡を行うことが考慮されると考察している。局所再発に対するサルベージ治療毎の予後の検討もしており、管腔内再発では手術以外にも内視鏡治療も治療選択になりうることが示された。 本論文は単施設の後ろ向き研究であるが多くの患者を含む研究である。食道扁平上皮癌患者を対象に、治療後の検査の頻度や種類についてその妥当性を議論することを目的とした研究は少ない。そのため、本論文で得られた結果は根治的化学放射線療法を受けて臨床的奏効を得た食道扁平上皮癌患者の経過観察法を検討するうえで意義がある。 よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。